

## (8) クモ類

クモ類 001	クモ目 ユウレイグモ科	岡崎市 絶滅危惧 I A類
<b>アケボノユウレイグモ <i>Belisana akebona</i> (Komatsu)</b>		

### 【選定理由】

愛知県では山地に分布する。生息環境は石垣・崖地・洞窟・トンネルなど湿潤な暗所を好む。多産する地域もあるが、平均して個体数は少ない。近年、生息地の開発や乾燥化等の影響を受け、著しく減少傾向にある。岡崎市では石原町で記録された（愛知県環境調査センター，2009）。

県・国の評価区分	
愛知県	絶滅危惧 I A類
環境省	リスト外

### 【形態】

全体長雌雄 2～2.5mm。眼は 6 眼。背甲の中央は黄褐色で、側縁は黒灰色ないし灰淡色。腹部は卵型で、腹部背面は淡黄色ないし淡灰色だが、茶褐色ないし濃茶褐色の個体もある。背面に褐色の斑紋を有するが、不明瞭や無斑の個体もある。脚は 4 対とも淡褐色で、非常に細長く 2cm ほどある（入江，2009）。



岡崎市石原町，2010年4月30日，緒方清人 撮影

### 【分布の概要】

日本では、本州・四国・九州に分布する（入江，2009）。愛知県では、新城市（旧鳳来町）・北設楽郡設楽町・豊橋市に分布する。本市では石原町（旧額田町）に分布する。

### 【生息地の環境／生態的特性】

豊橋市では洞窟（蛇穴）の壁面に棲んでいる。その他の地域では、岩が露出している古いトンネル、湿潤な崖地、岩場、石垣、小規模な洞穴等の壁面の窪みに不規則網を張り、上部に静止している。このように、野外でも生息しているので真洞窟性ではない。本市では石原町の闇菟溪谷のハイキングコース沿いの崖地のみ生息している。崖地に大小の岩が露出し、その窪みの上部に不規則網を張っている。5月ごろから成熟し、雄は、雌の網に侵入し交接の機会を伺う。雌は初夏から秋期に卵のうを作り、3～40卵ほどを糸でかがり包んで、口器に銜えて保護する。幼体で越冬する。

### 【現在の生息状況／減少の要因】

本市での初記録は2007年5月23日で石原町闇菟溪谷である。その後、2011年まで毎年確認している。年により増減するが、2007年5月23日は雌8頭、2009年6月20日は雌24頭・雄5頭、2009年7月26日は雌17頭・雄3頭、2010年4月30日は雌6頭・雄2頭、2010年8月8日は雌7頭、2010年9月18日は雌4頭、2011年7月5日は雌16頭・雄2頭であった。当然、見落としもあると思われるので、推定だが3～40頭は生息していると思われる。他市の生息地では、崖地の工事や石垣の補修工事などで絶滅や激減した地域もある。

### 【保全上の留意点】

本種は崖地や石垣など湿気の高い暗部に棲んでいる。乾燥にも弱く、既に絶滅した地域もあるので、周辺部の森林や水源等を確保して、湿気を保つような環境の保全が望まれる。また、崖地の工事、例えば、崖崩れや落石等の防止のために、壁面をコンクリート吹き付けや金網等で覆う工事は、直接生息地の破壊になるので最小限にすべきである。

### 【特記事項】

同属のシモングモ (*S. senoculata*) は本種と体形や色彩が酷似するが、主な環境は家屋や外壁などの、人工的な環境を好んで生息している。北設楽郡設楽町や豊田市（旧稲武町）などの山間部からも記録されるが、やはり平野部と同じく家屋や塀などに棲んでいる。本種もトンネルや崖地に掘られた洞など人工的な環境からも発見されるが、暗くて湿気のある環境をより好む傾向にあるので、生息地は限られている。

### 【引用文献】

愛知県環境調査センター（編），2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2009-動物編-, p.417. 愛知県環境部自然環境課，名古屋.

入江照雄，2009. ユウレイグモ科. 日本産クモ類, pp.106-111. 東海大学出版会，東京.

### 【関連文献】

八木沼健夫，1986. ユウレイグモ科. 原色日本クモ類図鑑, pp.28-32. 保育社，大阪.

新海栄一，2006. アケボノユウレイグモ. 日本のクモ, p.22. 文一総合出版，東京.

千国安之輔，1989. アケボノユウレイグモ. 写真日本クモ類大図鑑, p.27, p.171. 偕成社，東京.

（執筆者 緒方清人）

クモ類 002	クモ目 コモリグモ科	岡崎市 絶滅危惧 I A類
<b>テジロハリゲコモリグモ <i>Pardosa yamanoi</i> Tanaka et Suwa</b>		

**【選定理由】**

愛知県では平地から山地に分布する。どの地域も湿地に生息する。湿原によっては開発や乾燥化が進み、絶滅した地域もある（愛知県環境調査センター, 2009）。岡崎市では小呂町、池金町で記録されているが、極めて個体数は少ない。

県・国の評価区分	
愛知県	絶滅危惧 I B類
環境省	リスト外

**【形態】**

体長雌雄 4.8~6.3mm。雄の背甲は濃茶褐色で、中央と側縁は白色。腹部背面は濃茶褐色で、中央は前方から後方にかけて、白色で帯状となる。側縁も白色。真上から観ると、背甲から腹部末端にかけて 1 本の太い状になる。第 1 脚の全節に多数の白毛を生じる。雌の背甲は濃茶褐色で、中央は淡褐色。腹部背面は濃茶褐色で、褐色の不明瞭な心斑がある。全面に白色の斑紋を多数有する。脚は 4 対とも目立つ白毛は無い（田中, 2009）。



岡崎市小呂町, 2011年5月13日, 緒方清人 撮影

**【分布の概要】**

日本では、本州・四国・九州に分布する。愛知県では、名古屋市・日進市・豊川市・新城市（旧鳳来町・旧作手村）に分布する。本市では、小呂町・池金町・中島町（全て旧岡崎市）に分布する。

**【生息地の環境／生態的特性】**

本種は湿地や湿潤地に生息する。湿地ではミズゴケやモウセンゴケ等が自生し、ヒメタイコウチやハッチョウトンボ等が生息している。このような日当りのよい湿地に限られる。湿潤地でも記録しているが、埋め立てや開発等でどの地域においても絶滅した。現在は湿地のみ生息している。本市では小呂町小呂湿地と池金町北山湿地に限り生息している。5 月ごろ成体になり、雌は卵のうを糸器に着けて徘徊する。ふ化した子グモは母グモの背中に這い上がり、集団になり 1 週間ほど過ごした後に分散する。繁殖期は 8 月ごろまで続く。

**【現在の生息状況／減少の要因】**

本市での初記録は 1989 年 7 月 24 日で、中島町の湿潤地で雄 2 頭を発見した。残念ながら、1990 年に生息地の周辺部も含めて宅地化され、その影響で絶滅した。その後、本市からは発見されなかったが、2011 年 5 月 23 日に小呂町小呂湿地と池金町北山湿地で相次いで確認した。両湿地とも貴重な湿地なので、その保護のために湿原内での調査は最小限にとどめた。主に木道からの観察によるカウントだが、小呂湿地は面積も広いので個体数は 100 頭ぐらいと推測している。北山湿地群では A 湿地のみ生息している。面積も狭く、やはり木道からの観察によるカウントだが、個体数は 10 頭ぐらいと推測している。他市の生息地では、湿地とその周辺部を含んだ土地開発による影響で、絶滅や著しく減少した地域も存在する。また、名古屋市内のある湿地では、湿地性以外の植物が繁茂し環境悪化により絶滅した地域もある。

**【保全上の留意点】**

本種は湿地に依存度が高い。1990 年ごろまで名古屋市天白区天白溪湿地は良好な生息地であったが、周辺の樹木（主にコナラ）が生長し、その影響で湿地は日陰になり、一面にミズソバやシデ類などが繁茂した。2007 年の調査では、1 頭も確認されなかったため、絶滅したと思われる。このような事実から、両湿地とも周辺部の樹木が茂り日当たりが悪くなると、半日陰植物などが繁茂する恐れがある。環境が大きく変わる事によって、生息が脅かされる危険性が高い。

**【特記事項】**

オオアシコモリグモ属 (*Pardosa*) の多くは林床や裸地など、比較的乾燥した環境に生息するが、イナダハリゲコモリグモ (*P. agraria*) は湿地、湿潤地、水田など湿気のある環境を好む傾向が強く、本種と同所的に生息している地域も存在する。小呂湿地においても同じだが、イナダハリゲコモリグモの雄は背甲や腹部背面に白色の条はなく、雌の腹部背面は褐色で、目立つ白色斑紋はなく本種との識別は容易である。

**【引用文献】**

愛知県環境調査センター(編), 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2009-動物編-, p.431.  
愛知県環境部自然環境課, 名古屋.  
田中徳積, 2009. コモリグモ科. 日本産クモ類, pp.222-248. 東海大学出版会, 東京.

**【関連文献】**

八木沼健夫, 1986. コモリグモ科. 原色日本クモ類図鑑, pp.158-170. 保育社, 大阪.  
新海栄一, 2006. テジロハリゲコモリグモ. 日本のクモ, p.67. 文一総合出版, 東京.

(執筆者 緒方清人)

クモ類 003	クモ目 アワセグモ科	岡崎市 絶滅危惧ⅠA類
<b>アワセグモ <i>Selenops bursarius</i> Karsch</b>		

**【選定理由】**

愛知県では平地から里地に分布するが、極めて局地的である。主に、神社仏閣の境内に植樹されているスギやヒノキの大木に生息する。どの生息地においても個体数は少ない（愛知県環境調査センター，2009）。岡崎市では檜山町・鍛埜町で記録されたが、個体数は1～2頭と極めて少ない。

県・国の評価区分	
愛知県	絶滅危惧Ⅱ類
環境省	リスト外

**【形態】**

体長雌雄8～12mm。背甲は褐色ないし淡褐色で、茶褐色の斑がある。中央には逆ハ字形の模様がある。腹部は灰褐色ないし淡褐色で、まだら模様がある。下面は黒褐色。脚は4対とも各節は褐色ないし淡褐色で、茶褐色の斑がある。上顎の前牙堤に3歯、後牙堤に2歯を備える。雄触肢の脛節にきわめて大きく湾曲した突起がある。雌触肢に鎌状の細長い刺があり、7～8本の歯が鋸状に生える（小野，2009）。



岡崎市檜山町，2009年7月18日，緒方清人 撮影

**【分布の概要】**

日本では、本州・四国・九州・南西諸島に分布する（小野，2009）。愛知県では、豊田市・豊川市に分布する。本市では檜山町・鍛埜町（旧額田町）に分布する。

**【生息地の環境／生態的特性】**

県内で生息が確認された環境は全て神社仏閣の境内である。境内にはスギやヒノキの大木があり、その樹幹に生息している。本市では檜山町の須賀神社と鍛埜町の須佐之男神社で確認した。昼間は樹皮下のすき間に潜んでいるので、見つけにくい、夜間は這い出ることが多いので比較的に見つけやすい。雌雄は7月ごろに成体になり、雌は冬期でも観られる。産卵は夏期で卵のうは樹皮の裏側に付着させる。

**【現在の生息状況／減少の要因】**

県内で確認された生息地は、本市を含めて3市5地域である。中でも、豊田市猿投町猿投神社境内は個体数も多く、生息に適した環境となっている。本市での初記録は、2009年7月18日の檜山町須賀神社である。1本のスギの大木（御神木）にのみ生息し、雌1頭・1幼体の合計2頭を確認した。同地を2012年7月25日に再調査したが、やはり同じスギに雌1頭を確認した。2013年5月7日には鍛埜町須佐之男神社のスギの大木（御神木）で雌1頭・1幼体の合計2頭を確認した。いずれも樹皮下に潜んでいるので見つけにくい、極めて個体数は少ないと思われる。生平町八幡宮や滝尻町玉泉寺等の境内を調査したが、生息は確認できなかった。他市では、生息木の立ち枯れや伐採により、減少した地域もある。

**【保全上の留意点】**

県内で確認された生息地は、全て神社仏閣の境内である。境内には植樹されたスギ、ヒノキが年月を重ねて大木（古木）となり、天然記念物や名木に指定されている樹も少なくない。本種はそのような樹に棲んでいるので、間伐や伐採等の影響も受けにくいと思われるが、生息樹の保全に努める必要がある。また、スギドクガ等の害虫が発生したときに殺虫剤の散布は控えるべきである。

**【特記事項】**

科は異なるが体形が似ているエビグモ科キハダエビグモ（*Philodromus spinitarsis*）も樹皮下に潜んでいる。一瞬間間違える時があるが、体の大きさや色彩の違いで識別は容易である。ヒトエグモ（*Plator nipponicus*）は愛知県から未発見である。

**【引用文献】**

愛知県環境調査センター（編），2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち2009-動物編-, p.443.  
愛知県環境部自然環境課，名古屋.  
小野展嗣，2009. アワセグモ科. 日本産クモ類, p.470. 東海大学出版会，東京.

**【関連文献】**

八木沼健夫，1986. アワセグモ科. 原色日本クモ類図鑑, pp.196-197. 保育社，大阪.  
新海栄一，2006. アワセグモ. 日本のクモ, p.231. 文一総合出版，東京.

（執筆者 緒方清人）



キシノウエトタテグモ *Latouchia typica* (Kishida)

## 【選定理由】

愛知県では主に都市部から平野部に分布するが、極めて局地的である。主に神社仏閣の境内や公園などの崖地や土積みの石垣などに生息するが、道路拡張や石垣等の工事で生息数が減少している（愛知県環境調査センター, 2009）。岡崎市では康生町・欠町・滝町から記録された。

県・国の評価区分	
愛知県	絶滅危惧 I B 類
環境省	準絶滅危惧

## 【形態】

体長雌 10~12mm。雄 8~10 mm。背甲は濃茶褐色で側縁は淡色。茶褐色の斑がある。腹部は褐色ないし紫褐色で、中央に灰黒色の縦条と 3~4本の横条がある。この模様が本種の特徴である。脚は4対とも腿節は黒褐色で、膝節、脛節、蹠節、跗節は茶褐色。第1脚の脛節、蹠節、跗節に多数の太い刺を有す（小野, 2009）。



岡崎市欠町, 2011年3月24日, 緒方清人 撮影

## 【分布の概要】

日本では、本州・四国・九州に分布する（小野, 2009）。愛知県では、名古屋市・東海市・日進市・豊田市（旧豊田市）・豊橋市に分布する。本市では、康生町・欠町・滝町（全て旧岡崎市）に分布する。

## 【生息地の環境／生態的特性】

県内で生息が確認された環境は、城や神社仏閣の境内、公園、丘陵地や低山の歩道沿いである。石垣では土積みの部分、赤土の崖地、植木の盛り土等に穴を掘り管状住居を作る。住居の深さは成体でおおよそ 15cm 前後である。住居の入り口には円形の扉を作り、普段はその扉を閉じているので、極めて発見しづらい。普段は入り口で扉を僅かに空けて獲物を待つ。昆虫類や多足類などの獲物が扉に近づくと、一瞬に飛び出して捕獲し引きずり込む。

## 【現在の生息状況／減少の要因】

本市の岡崎城公園は県下でも最大級の生息地である。長い間、他の地域からの発見はなかったが、筆者が 2011 年 3 月 24 日に欠町の東公園内で多数の住居を確認した。生息範囲は広く、「はとが池」「ひょうたん池」「あしべ池」の周囲、歩道脇の緑地帯の盛り土、赤土の崖地、松の根元の土の部分等である。この日の調査では約 200 住居を確認した。さらに、2011 年 4 月 9 日に滝町滝山寺の石垣で 2 住居が確認された（杉山時雄氏私信）。筆者は同年 9 月 26 日に同地を調査したが、確認できなかった。滝山寺では個体数は極めて少ないと思われる。他市、特に名古屋市・東海市では丘陵地や私有地等に生息する個体が、土地開発や道路拡張工事等により絶滅や激減した。

## 【保全上の留意点】

岡崎城公園では天守閣とその周囲の石垣に生息している個体は、天然記念物に指定されている（岡崎市教育委員会, 2009）。しかし、外堀、乙川、伊賀川河川敷の周辺の石垣にも多数生息しているので、生息域での工事は事前に個体数や分布範囲等調査し、工事は最小限にすべきである。

## 【特記事項】

平成 19 年 6 月 12 日に本市天然記念物指定。指定範囲は、康生町岡崎城の石垣 170m。

## 【引用文献】

愛知県環境調査センター（編）, 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2009-動物編-, p.419.  
愛知県環境部自然環境課, 名古屋.  
小野展嗣, 2009. トタテグモ科. 日本産クモ類, pp.89-91. 東海大学出版会, 東京.  
岡崎市教育委員会, 2008. 岡崎の文化財, 21pp. 岡崎市.

## 【関連文献】

八木沼健夫, 1986. トタテグモ科. 原色日本クモ類図鑑, pp.3-4. 保育社, 大阪.  
新海栄一, 2006. キシノウエトタテグモ. 日本のクモ, p.22. 文一総合出版, 東京.  
千国安之輔, 1989. 写真日本クモ類大図鑑, p.19, p.163. 偕成社, 東京.

（執筆者 緒方清人）

クモ類 005	クモ目 アシナガグモ科	岡崎市 絶滅危惧 I B 類
<b>チクニドヨウグモ <i>Metleucauge chikunii</i> Tanikawa</b>		

**【選定理由】**

愛知県では、山地に分布するが、極めて局地的である。溪流に生息するが、どの地域でも個体数は少ない(愛知県環境調査センター, 2009)。豪雨による増水や河川工事等の影響等で減少傾向にある。岡崎市では、石原町で記録された。

県・国の評価区分	
愛知県	絶滅危惧 I B 類
環境省	リスト外

**【形態】**

体長雌 7.5 ~11.5mm。雄 6.5~8mm。背甲は明褐色で側縁と中央は黒灰色。腹部は淡色ないし淡紫色で全面に淡黄色の斑が多数ある。前縁から中央にかけ逆 U 字形に太い黒灰色の波形模様。中心部は黒灰色の斑で、末端にかけて 3~4 条がある。脚は 4 対とも腿節は淡褐色で、上面に黒灰色の条がある。膝節、脛節、蹠節、跗節は黒灰色である(谷川, 2009)。



岡崎市石原町, 2010年5月29日, 緒方清人 撮影

**【分布の概要】**

日本では、北海道・本州・四国・九州に分布する(谷川, 2009)。愛知県では、豊田市(旧足助町・旧稲武町・旧豊田市)・北設楽郡設楽町に分布する。本市では、石原町(旧額田郡)に分布する。

**【生息地の環境／生態的特性】**

県内で生息が確認された環境は、いずれも山間部の溪流である。岩と岩の間に水平円網を張り、昼間は網の近くの岩に静止しているが、夜間は網の中央に静止する。カゲロウやカワゲラなどの水生昆虫等が網にかかる素早く捕獲する。成体は5月ごろから観られるが、卵のうは確認していない。幼体で越冬する。

**【現在の生息状況／減少の要因】**

本市で確認されたのは閨苧溪谷のみである。溪流には大小の岩が露出し、その間に円網を張っている。初記録は2007年5月23日の雄1頭、雌1頭である。その後の記録を列举すると、2007年7月26日の雌1頭。2010年5月29日の雄1頭、雌1頭。2010年8月8日の雌幼体1頭である。このように、個体数は極めて少ない。他市の生息地では、河川の砂防ダム工事で絶滅した地域もあるので、河川工事は本種の生存に大きなダメージを与えている。

**【保全上の留意点】**

閨苧溪谷は本宮山県立自然公園に指定されているので、生息地の開発や種の採集圧等の影響は少ないと思われる。しかし、生息範囲が猿飛橋の上下流間と非常に狭いので、その間での河川工事、特に岩の移動や撤去等は注意が必要である。

**【特記事項】**

本種が生息している環境には、同属のタニマノドヨウグモ (*M.kompirensis*) とメガネドヨウグモ (*M.yunohamensis*) も確認される。体形や色彩も似ているので、野外での識別は注意したい。違いを述べると、円網を張る場所や網の大きさが異なる。本種は岩と岩の隙間や水しぶきがかかるような、比較的暗い場所を好み 30cm 前後の円網を張る。タニマノドヨウグモは広い空間を好み、ときに 1m を超えるような大型の網を溪流上に張る。メガネドヨウグモは溪流だけではなく、池沼などの岸边や林縁部等多様な環境に棲んでいる。

**【引用文献】**

愛知県環境調査センター(編), 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2009-動物編-, p.423.  
愛知県環境部自然環境課, 名古屋.  
谷川明男, 2009. アシナガグモ科. 日本産クモ類, pp.405-419. 東海大学出版会, 東京.

**【関連文献】**

八木沼健夫, 1986. アシナガグモ科. 原色日本クモ類図鑑, pp.127-136. 保育社, 大阪.  
新海栄一, 2006. チクニドヨウグモ. 日本のクモ, p.175. 文一総合出版, 東京.  
千国安之輔, 1989. 写真日本クモ類大図鑑, p.68, p.221. 偕成社, 東京.

(執筆者 緒方清人)

クモ類 006	クモ目 コガネグモ科	岡崎市 絶滅危惧 I B 類
<b>キジロオヒキグモ <i>Arachnura logio</i> Yaginuma</b>		

**【選定理由】**

愛知県では、里山から低山に分布する。どの地域においても個体数は1～数頭と少ない。岡崎市では桑谷町・池金町・天神山緑地で記録されたが、いずれも1個体である。2009年以降は記録されていない(愛知県環境調査センター, 2009)。

県・国の評価区分	
愛知県	絶滅危惧 I B 類
環境省	リスト外

**【形態】**

体長雌は 25～28mm で大型であるが、雄は 1.5mm と極端に小さい。体形も全く異なる。雌の背甲は淡褐色ないし黄白色。腹部は楕円形で、両肩が大きく突き出る。後端は細長く、その先端部に複数の突起があり、中央突起は毛で覆われている。色彩は淡褐色で、黄褐色の 2 本の縦条が目立つ。胸版は黄白色で多数の黒点がある。雄は全体に濃褐色。雌のように腹部前方は分岐せず、後端の尾状部もないので別種のようなのである(谷川, 2009)。



岡崎市天神山緑地, 2004年7月25日, 緒方清人 撮影

**【分布の概要】**

日本では、本州・四国・九州・南西諸島に分布する(谷川, 2009)。愛知県では、豊田市(旧稲武町・旧豊田市)・瀬戸市に分布する。本市では、池金町・桑谷町・天神山緑地(全て旧岡崎市)に分布する。

**【生息地の環境／生態的特性】**

県内で生息が確認された環境は、いずれも里山や丘陵地の林内や林縁部である。地上から1～1.5m と比較的低い位置に垂直円網(キレ網)を張る。5月ごろから成体になり、雌は網の中心部に静止している。7～8月には円網の中央付近に幾つもの卵のうを縦に付着させる。雄の記録は豊田市の1例だけである(緒方, 未発表)。幼体で越冬する。

**【現在の生息状況／減少の要因】**

本市での初記録は、2001年7月22日に池金町北山湿地の林道沿いである。この雌個体は、9月8日まで確認された。2006年9月14日に1雌を確認したが、その後は記録されていない。2004年7月25日に天神山緑地で1雌。2008年10月5日に桑谷町(扇子山)で1幼体を確認されたが、いずれも1回だけの記録である。それ以降、発見されていない。減少の要因は詳しく分からないが、県内で確認されたのは里山や低山での記録が多いので、伐採等の開発は、本種の直接的な減少要因としてあげられる。

**【保全上の留意点】**

本種は平地の雑木林や、県北部の森林地帯からは発見されていない。瀬戸市や豊田市でも低山で、里山と言われている環境である。しかし、どの地域においても毎年発生するのではなく、散発的である。もともと個体数の少ないクモと思われるので、里山の保全が望まれる。

**【特記事項】**

県内で確認されたコガネグモ科は74種だが、本種の雌に似た体形のクモはいないので、識別は容易である。卵のうは垂直円網の中心部に縦一列に数個付着させるので、一見するとゴミグモの円網に似ているところがある。同属のキオヒキグモ(*A.melanura*)は八重山諸島に分布する。

**【引用文献】**

愛知県環境調査センター(編), 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2009-動物編-, p.424.  
愛知県環境部自然環境課, 名古屋.  
谷川明男, 2009. コガネグモ科. 日本産クモ類, pp.420-463. 東海大学出版会, 東京.

**【関連文献】**

八木沼健夫, 1986. コガネグモ科. 原色日本クモ類図鑑, pp.91-125. 保育社, 大阪.  
新海栄一, 2006. キジロオヒキグモ. 日本のクモ, p.184. 文一総合出版, 東京.  
千国安之輔, 1989. 写真日本クモ類大図鑑, p.77, p.213. 偕成社, 東京.

(執筆者 緒方清人)



クモ類 007	クモ目 コガネグモ科	岡崎市 絶滅危惧 I B 類
<b>マメイタイセキグモ <i>Ordgarius hobsoni</i> (O. P.-Cambridge)</b>		

**【選定理由】**

愛知県では、丘陵地から低山にかけて分布する。どの地域においても、個体数は1~5頭と少ない。生息環境の多くは林縁部で、生息域の工事や開発等（愛知県環境調査センター, 2009）により、もともと個体数は少ないので、今以上に減少が考えられる。岡崎市では古部町、檜山町で記録された。

県・国の評価区分	
愛知県	絶滅危惧 I B 類
環境省	リスト外

**【形態】**

体長雌 5.5 ~6.5mm。雄 1.5~2mm。雌の背甲は暗褐色。腹部は明褐色で中央に白色の模様と、黒色の斑が横一列にならぶ。さらに後方に黒色の条がある（谷川, 2009）。個体によりその斑の形や大小に違いがある。腹部全面に赤褐色の瘤が多数あるのが、本種独特の形態となる。雄は背甲の後部に 4 つの小さな突起がある。雄の採集例は少ない。



岡崎市檜山町, 2012年7月25日, 緒方清人 撮影

**【分布の概要】**

日本では、本州・四国・九州・南西諸島に生息する（谷川, 2009）。愛知県では、日進市・豊田市（旧豊田市・旧足助町）に分布する。岡崎市では古部町・檜山町に分布する。

**【生息地の環境／生態的特性】**

県内で生息が確認された環境は、平地の丘陵地や低山（里山）である。奥三河の山間部では発見されていない。主に、林縁部沿いの草地、林縁部周辺の草地、果樹園の下の草等に生息し、日中はイネ科植物（特にススキやチガヤ等）の葉裏に静止しているのが観察される。夜間に活動し、第2脚先端より粘球を糸でつり下げ、蛾が近づくと、それを回転させて捕獲する。雄の発見例は非常に少ない。

**【現在の生息状況／減少の要因】**

全国的に発見例は少なく、珍しいクモのひとつである。本市での初記録は、2003年7月21日に古部町で1雌幼体が確認された（杉山時雄氏私信）。その後、2012年7月20日に檜山町おおだの森で確認された（判家卓司氏私信）。筆者は7月25日に同地を訪れ、再確認する事ができた。いずれも雌1個体だけ、判家氏の発見場所より、かなり離れているので別個体の可能性も高い。減少の要因は詳しく判明されていないが、生息域の草刈りや林縁部に沿っての伐採等が、直接的な要因としてあげられる。

**【保全上の留意点】**

県内で観察された個体の多くは、日中ススキの葉裏に静止していた。檜山町のおおだの森でも、山頂近くの山道沿いのススキの葉裏で発見された。筆者は広葉樹のヌルデやナンテンでも確認しているが、樹木での記録は少ない。本種は夏期に成熟するが、この時期はよく除草作業が実地される。日進市では、その影響で生息できなくなった。除草作業や歩道整備など、環境が変わるような工事は十分注意すべきである。

**【特記事項】**

同様に稀種のひとつである同属のムツトゲイセキグモ (*O. sexspinosus*) は本種と同じような生態だが、腹部背面に大小の丸い突起はないので識別は容易である。県内では名古屋市・豊田市・豊川市（旧音羽町）・新城市（旧鳳来町）で記録されたが、本市では未記録である。

**【引用文献】**

愛知県環境調査センター（編）, 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2009-動物編-, p.426.  
愛知県環境部自然環境課, 名古屋.  
谷川明男, 2009. コガネグモ科. 日本産クモ類, pp.420-463. 東海大学出版会, 東京.

**【関連文献】**

八木沼健夫, 1986. コガネグモ科. 原色日本クモ類図鑑, pp.91-125. 保育社, 大阪.  
新海栄一, 2006. マメイタイセキグモ. 日本のクモ, p.165. 文一総合出版, 東京.

（執筆者 緒方清人）

クモ類 008	クモ目 コモリグモ科	岡崎市 絶滅危惧 I B 類
<b>イサゴコモリグモ <i>Pardosa isago</i> Tanaka</b>		

**【選定理由】**

愛知県では、極めて限られた河川に分布する。生息域では多産するが、特異な環境に生息するだけに、河川工事等ともなう開発等により減少が懸念される（愛知県環境調査センター, 2009）。岡崎市では岡町で記録された。

県・国の評価区分	
愛知県	絶滅危惧 I B 類
環境省	リスト外

**【形態】**

体長雌 6.3~8.9mm。雄 4.9~6.4mm。背甲雌は灰黄褐色。雄は灰暗褐色。中窩は暗色。腹部は雌で灰黄褐色。雄で灰褐色。雌雄とも淡色の淡黄色ないし淡色の斑状の模様が多数ある。脚は 4 対とも茶褐色で腿節、膝節、脛節、蹠節、跗節に暗色の環斑がある。また、各節に太い刺を有する。胸板は灰黄色で、中央上半分に細い淡黄色斑がみられる（田中, 2009）。



岡崎市岡町, 2008 年 6 月 19 日, 緒方清人 撮影

**【分布の概要】**

日本では、本州・四国・九州に生息する（田中, 2009）。愛知県では豊田市（旧旭町）・豊川市（旧豊川市・旧一宮町）・豊橋市・新城市（旧新城市・旧鳳来町）に分布する。岡崎市では岡町（旧岡崎市）に分布する。

**【生息地の環境／生態的特性】**

県内で生息が確認された環境は、一級河川とその支流の中流部付近である。岸边には拳大の石がたくさんあり、そのような環境のみ生息する。普段は石の表面を徘徊しているが、警戒すると石の下や隙間に潜り込み身を隠す。6~8月に成体になり、雌は卵のうを糸器につけて徘徊する。ふ化した子グモは母グモの背中に這い上がり、集団になり 1 週間ほど過ごした後に分散する。幼体で越冬する。

**【現在の生息状況／減少の要因】**

本市では岡町の乙川河川敷のみ確認された。堰堤の下流左岸川に約 30×10 数 m の間に、拳大の石が敷き詰められている。その水際数 m に限って生息している。徘徊性が早く、警戒すると石の下に潜んで身を隠す。2004 年 7 月 24 日の調査では雌雄合計 15 頭ほど確認した。2006 年から 2009 年にかけて 5 回調査したが、個体数は 11~23 頭であった。他市では、生息域の河川工事で激減した地域もある。

**【保全上の留意点】**

人為的な影響を受けやすいので、生息地での河川工事は最小限にとどめ、保全対策が必要である。また、河川敷の車の乗り入れや河原でのバーベキューなどは慎むべきである。

**【特記事項】**

オオアシコモリグモ属 (*Pardosa*) で、河川に生息する種は本種とキシベコモリグモ (*Pyaginuma*) が挙げられる。この 2 種は体形も色彩も酷似するので、野外での識別は要注意である。やはり、顕微鏡による同定を要する。本県におけるキシベコモリグモの記録は非常に少なく、筆者が 1993 年 4 月 18 日に北設楽郡設楽町田峯（豊川）で発見しただけである。その後、確認地の調査は実施していないので、分布等も含めて不明である。本市における本種の生息地ではウヅキコモリグモ (*Pastrigera*) も記録されるが、体色の違いにより識別は容易である。

**【引用文献】**

愛知県環境調査センター(編), 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2009-動物編-, p.430.  
愛知県環境部自然環境課, 名古屋.  
田中穂積, 2009. コモリグモ科. 日本産クモ類, pp.222-248. 東海大学出版会, 東京.

**【関連文献】**

八木沼健夫, 1986. コモリグモ科. 原色日本クモ類図鑑, pp.158-170. 保育社, 大阪.  
新海栄一, 2006. イサゴコモリグモ. 日本のクモ, p.68. 文一総合出版, 東京.  
千国安之輔, 1989. イサゴコモリグモ. 写真日本クモ類大図鑑, p.115, p.246. 偕成社, 東京.

(執筆者 緒方清人)



クモ類 009	クモ目 ジグモ科	岡崎市 絶滅危惧Ⅱ類
<b>ワスレナグモ <i>Calommata signata</i> Karsch</b>		

**【選定理由】**

愛知県では、平野部に広く分布するが、地中に棲むために発見例は少ない。どの生息地においても個体数は極めて少ない。生息域の開発や宅地造成等で、個体数の減少が懸念される（愛知県環境調査センター，2009）。岡崎市では伊賀町と欠町で記録された。

県・国の評価区分	
愛知県	絶滅危惧Ⅱ類
環境省	準絶滅危惧

**【形態】**

体長雌 13～18mm。雄 5～8mm。雌の背甲は黄褐色ないし淡褐色。腹部は球形で、淡褐色ないし淡紫色で、中央から前方にかけて濃紫色で、前方に三角形の背板がある。顎は巨大で濃褐色。牙堤も 5mm 以上あり、強い歯がならぶ。歩脚は褐色で膝節は赤褐色味がある。雄は全体に灰黒色で、腹部は楕円形。脚は 4 対とも黒色で蹠節の先端から附節は赤褐色。触肢は灰黒色で腿節は長く、膝節が白灰色で徘徊中は目立つ（小野，2009）。



岡崎市欠町，2011年11月9日，緒方清人 撮影

**【分布の概要】**

日本では、本州・四国・九州に生息する（小野，2009）。愛知県では、名古屋市・知多市・豊明市・日進市・刈谷市・知立市・安城市に分布する。本市では、伊賀町（野沢，1985）・欠町に分布する。

**【生息地の環境／生態的特性】**

県内で生息が確認された環境は、城や神社仏閣の境内、公園、民家の庭、果樹園、農地等である。地中に穴を掘り管状の住居を作る。住居の深さは成体で 15cm 前後である。住居の入口はふさがず、また、トタテグモ類のように扉も着けない。しかし、非常に発見しづらい。日中は住居の奥にいますが、夜間は入り口近くで獲物を待つ。昆虫類や多足類などの獲物が、住居に近づく素早く飛びついて捕獲する。雌成体は周年観られるが、雄は秋期に成体になり、雌の住居を求めて徘徊する。子グモの分散は秋期におこなう。

**【現在の生息状況／減少の要因】**

本市では村上（1960）と野沢（1985）によって報告されたが、現在の生息状況は不明である。筆者は 2011 年 11 月 9 日に欠町の東公園の「はとが池」周囲の歩道脇の緑地帯で、10 住居を確認した。周辺もくまなく調査したが、確認はできず極めて狭い範囲に分布していると思われる。

本種は地中に住居を造るので、発見が困難である。そのために、未調査のまま宅地造成や道路拡張工事等で生息地が奪われている。安城市や豊明市では、その影響で減少した。

**【保全上の留意点】**

生息地での歩道や緑地帯の工事により、本種の生存に大きなダメージを与えることになりかねない。また、除草剤や農薬等の散布は、十分な配慮が必要である。

**【特記事項】**

小野（2009）・新海（2010）は本種をワスレナグモ科（Calommatidae）として分類しているが、谷川（2013）は従来どおりジグモ科（Atypidae）としている。今回、谷川の分類に従った。ジグモ（*Atypus karschii*）も地中に棒状の住居を作るが、住居は地上まで延びているので識別は容易である。

**【引用文献】**

愛知県環境調査センター（編），2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2009-動物編，p.434.  
愛知県環境部自然環境課，名古屋。  
小野展嗣，2009. ワスレナグモ科. 日本産クモ類，p.86. 東海大学出版会，東京。  
新海栄一，2010. ワスレナグモ. 日本のクモ，p.25. 文一総合出版，東京。  
谷川明男，2013. 日本産クモ類目録，Ver.2013 R2. インターネット。  
野沢孝之朗，1985. 岡崎市のクモ. 新編岡崎市史自然 14，pp.1178-1200. 新編岡崎市史編さん委員会，岡崎。  
村上 勝，1960. 岡崎市のクモ. 謄写印刷。

**【関連文献】**

八木沼健夫，1986. ジグモ科. 原色日本クモ類図鑑，pp.5-7. 保育社，大阪。  
千国安之輔，1989. ワスレナグモ. 写真日本クモ類大図鑑，p.20, p.164. 借成社，東京。

（執筆者 緒方清人）

クモ類 010	クモ目 カネコトタテグモ科	岡崎市 絶滅危惧Ⅱ類
<b>カネコトタテグモ <i>Antrodiaetus roretzi</i> (L. Koch)</b>		

**【選定理由】**

愛知県では、平野部から山間部にかけて広く分布する。地中に生息するために、住居の発見が極めて困難で、発見される前に開発される事もあり、近年減少傾向にある（愛知県環境調査センター，2009）。岡崎市では滝町、東阿知和町、切山町など 15 町から記録されているが、いずれも生息数は単独から数頭と少ない。また、生息地が開発され、すでに絶滅した地域もある。

県・国の評価区分	
愛知県	絶滅危惧Ⅱ類
環境省	準絶滅危惧

**【形態】**

体長雌 12～16mm。雄 10～13mm。雌の背甲は濃茶褐色ないし茶褐色で、側縁は褐色。腹部は楕円形で、褐色ないし淡褐色で、中央が茶褐色で、前方に三角形の背板がある。顎は濃褐色。前牙堤に 10～15 の鋭い歯が鋸状にならぶ。脚は 4 対とも茶褐色で、特に第 1 脚、第 2 脚の脛節、蹠節、跗節に太い刺を多数有する。雄は全体に灰黒色で、腹部は楕円形。歩脚は黒色で脛節の下方に長毛を有する。触肢は灰黒色で脛節は長く、脛節は太い（小野，2009）。



岡崎市池金町，2012 年 12 月 3 日，緒方清人 撮影

**【分布の概要】**

日本では、本州・九州に分布する（小野，2009）。愛知県では、名古屋市・犬山市・小牧市・知多市・常滑市・知多郡南知多町・日進市・豊田市（旧豊田市・旧足助町・旧稲武町・旧下山村・旧旭町）・豊川市（旧豊川市・旧音羽町）・豊橋市・新城市（旧新城市・旧鳳来町）・北設楽郡設楽町に分布する。本市では、滝町（須賀，1989）・大柳町・八ツ木町・東阿知和町・西阿知和町・鉢地町・天神山緑地・切山町・茅原沢・桑谷町・石原町・池金町・山中町・奥殿町・須淵町・滝美東 1・小呂町に分布する。

**【生息地の環境／生態的特性】**

県内で生息が確認された環境は、城や神社仏閣の境内、公園、丘陵地、山間部等である。住居の多くは赤土の崖地であるが、樹の根元にも観られる。地中に穴を掘り、入り口に両開きの扉を着ける。扉には土粒やコケなどを付着させているので、周囲の環境に似て極めて発見しづらい。住居の深さは成体で 15cm 前後である。普段はその扉を閉じている状態で、入り口近くで獲物を待つ。昆虫類や多足類などの獲物が住居に近づくと、扉を一瞬に開けて捕獲し引きずり込む。雌成体は周年観られるが、雄は秋～冬期に成体になり、雌の住居を求めて徘徊する。

**【現在の生息状況／減少の要因】**

本市では 15 町から記録されたが、各町から 1～2 地点で個体数も 1～数頭である。過去に確認された鉢地町・大柳町・東阿知和町・切山町では土地開発や造成等で生息地は破壊された。現在は神社仏閣の境内、桑谷町（扇子山）・八ツ木町（自然体験の森）・池金町（北山湿地）などの、開発の手がおよばない自然環境保全地域内等である。本種は特異な環境に生息するために、宅地造成や道路拡張工事等の環境破壊によって、次々と生息域が消滅している。

**【保全上の留意点】**

赤土の崖地、それも限られた狭い範囲に生息するので、周辺部を含めた環境保全が望まれる。

**【特記事項】**

本種の住居の扉は両開きで、キシノウエトタテグモとキノボリトタテグモは円形で片開きである。つまり、住居の構造で種の識別は容易である。北海道には同属のエゾトタテグモ (*A. yesoensis*) が分布する。

**【引用文献】**

愛知県環境調査センター（編），2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2009・動物編・，p.435.  
愛知県環境部自然環境課，名古屋.  
須賀瑛文，1989. 愛知県・三重君・静岡県におけるトタテグモ類三種について，蜘蛛，22: 9-17.  
小野展嗣，2009. カネコトタテグモ科. 日本産クモ類，pp.87-88. 東海大学出版会，東京.

**【関連文献】**

八木沼健夫，1986. カネコトタテグモ科. 原色日本クモ類図鑑，p.2. 保育社，大阪.  
新海栄一，2006. カネコトタテグモ. 日本のクモ，p.24. 文一総合出版，東京.  
千国安之輔，1989. カネコトタテグモ. 写真日本クモ類大図鑑，p.18, p.162. 偕成社，東京.

（執筆者 緒方清人）

キノボリトタテグモ *Conothele fragaria* (Dönitz)

## 【選定理由】

愛知県では、平野部から山地にかけて広く分布する。樹幹や崖地の表面に袋状の住居を作る。しかし、住居の発見が極めて困難なために、生息域の開発等で、近年個体数が減少している（愛知県環境調査センター，2009）。岡崎市では鴨田町、大柳町、石原町など14町から記録されているが、いずれも生息数は1～数頭と少ない。

県・国の評価区分	
愛知県	絶滅危惧Ⅱ類
環境省	準絶滅危惧

## 【形態】

体長雌10～12mm。雄8～10mm。雌の背甲は濃茶褐色ないし茶褐色で、側縁は褐色。腹部は楕円形で、黒褐色ないし黒紫褐色で、全面に顆粒が多数ある。顎は濃褐色。前牙堤に10～15の鋭い歯が鋸状にならぶ。脚は4対とも茶褐色で、特に第1脚、第2脚の脛節、蹠節、跗節に太い刺を多数有する。雄は全体に灰黒色で、腹部は楕円形。歩脚は黒色。触肢は灰黒色で腿節は長く、脛節は太い（小野，2009）。



岡崎市石原町，2011年2月27日，緒方清人 撮影

## 【分布の概要】

日本では、本州・四国・九州・南西諸島に分布する（小野，2009）。愛知県では、名古屋市・常滑市・知多郡南知多町（須賀，1989）・日進市・豊田市（旧豊田市・旧足助町・旧稲武町）・西尾市（旧西尾市）・蒲郡市・豊川市（旧豊川市・旧音羽町）・豊橋市・新城市（旧新城市・旧鳳来町）・北設楽郡設楽町・豊根村（旧富山村）に分布する。本市では、鴨田町・大柳町・八ツ木町・康生町・東阿知和町・西阿知和町・奥山田町・茅原沢・桑谷町・石原町・池金町・生平町・山中町・小呂町に分布する。

## 【生息地の環境／生態的特性】

県内で生息が確認された環境は、城や神社仏閣の境内、公園、丘陵地、山間部等である。住居の多くは大木の樹幹の表面だが、露出した根や崖地でも観られる。住居は楕円形で成体になると3～4cmになる。入り口には両開きの扉を着け、住居の表面に土粒やコケなどを付着させているので、周囲の環境に似て極めて発見しづらい。普段はその扉を閉じている状態で、入り口近くで獲物を待つ。昆虫類や多足類などの獲物が住居に近づくと、一瞬の間に扉から飛び出して捕獲し引きずり込む。雌成体は周年観られるが、雄は初夏から夏期に成体になり、雌の住居を求めて徘徊する。

## 【現在の生息状況／減少の要因】

本市では14町から記録されたが、各町から1～2地域で個体数も1～3頭である。過去に確認された大柳町・東阿知和町では土地開発や造成等で生息地は破壊された。現在は茅原沢や山中町などの神社仏閣の境内、桑谷町（扇子山）・八ツ木町（自然体験の森）・池金町（北山湿地）等は、開発の手がおよばない自然環境保全地域内等である。私有地内に生息地がある地域では、宅地開発や道路拡張工事等による影響で次々に破壊されている。

## 【保全上の留意点】

本種は名の由来でもあるスギ・ヒノキ・ケヤキ・コナラなどの大木の樹皮上のほか、崖地や石垣などの表面でも住居を造る。極めて限られた環境に生息するので、大木の伐採や崖地などの工事は十分な配慮が必要である。近年は、生息木がナラ枯れの被害を受けているのも確認した。

## 【特記事項】

本種とキシノウエトタテグモは住居に円形の扉をつける。両種は同じ場所に生息する場合もあるので、識別は注意を要する。相違点はすでに前述したので、その頁を参考にいただきたい。

## 【引用文献】

- 須賀瑛文，1989. 愛知県・三重県・静岡県におけるトタテグモ類三種について，蜘蛛，22: 9-17.  
 愛知県環境調査センター（編），2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち2009-動物編，p.436.  
 愛知県環境部自然環境課，名古屋.  
 小野展嗣，2009. トタテグモ科. 日本産クモ類，pp.89-91. 東海大学出版会，東京.

## 【関連文献】

- 八木沼健夫，1986. トタテグモ科. 原色日本クモ類図鑑，pp.3-4. 保育社，大阪.  
 新海栄一，2006. キノボリトタテグモ. 日本のクモ，p.23. 文一総合出版，東京.  
 千国安之輔，1989. キノボリトタテグモ. 写真日本クモ類大図鑑，p.19, p.163. 借成社，東京.

（執筆者 緒方清人）



クモ類 012	クモ目 ヤギヌマグモ科	岡崎市 絶滅危惧Ⅱ類
<b>ヤマトヤギヌマグモ <i>Telema nipponica</i> (Yaginuma)</b>		

**【選定理由】**

愛知県では、低山から山地に分布するが、生息地は極限られている。微小なクモで落葉層に生息するために、生息域の開発等で個体数の減少が懸念される。岡崎市では、鉢地町から記録された。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	リスト外

**【形態】**

体長雌雄 0.8 ~1.2mm。眼は 6 眼。背甲は赤褐色。腹部は紫灰色ないし紫褐色で、全面に長毛を有する。上顎の前牙堤に 1 歯があり、前後牙堤にそれぞれ数個の歯を備える。脚は 4 対とも淡橙色で各脛節に太い刺がある（小野, 2009）。



岡崎市鉢地町, 2007年11月4日, 緒方清人 撮影

**【分布の概要】**

日本では、本州・四国・九州に生息する（小野, 2009）。愛知県では、豊田市（旧豊田市）・北設楽郡設楽町に分布する。本市では、鉢地町に分布する。

**【生息地の環境／生態的特性】**

県内で生息が確認された環境は、丘陵地や山地である。針葉樹や落葉広葉樹の混生する林内の地表（落葉層）のすき間にシート網を張っている。成体を 5 月・9 月・10 月に採集しているの、年 2 過性と思われるが、成熟期、産卵期などの生態等は不明である。

**【現在の生息状況／減少の要因】**

県内では豊田市坂上町（六所山）、北設楽郡設楽町（段戸裏谷）と、本市では鉢地町である。この 3 地域しか確認されていない。六所山、段戸裏谷は両環境とも原生林で自然度が高い。鉢地町での記録は 1 例で、2007 年 11 月 4 日の雄 5 頭、雌 3 頭である。生息環境は丘陵地の雑木林で、カクレミノ・シイ・アカメガシワ・ヒサカキ・スギ等が自生している。そのリター層から発見した。その後は、未調査なので、生息状況は不明である。このような環境は他の地域でも存在すると思うのだが、確認されていない。本生息地は私有地であるため、開発の危険性を懸念している。県内でも記録の少ない種なので、生息域の環境保全を切望する。

**【保全上の留意点】**

明確な減少の要因は把握していないが、生息地には源流や細流があり、リター層は湿気を含んでいる。乾燥化を防ぐためにも、広範囲な生息域の保存が望まれる。

**【特記事項】**

ヤギヌマグモ科は世界で 7 属約 30 種が知られている。日本では 1 属を産する。基準産地は山梨県南都留郡鳴沢村背負子第二風穴である。日本以外では、中国に 10 種以上を産し、グアテマラ、南ヨーロッパからもそれぞれ 1 種が知られている（小野, 2009）。

**【引用文献】**

小野展嗣, 2009. ヤギヌマグモ科. 日本産クモ類, p.121. 東海大学出版会, 東京.

**【関連文献】**

八木沼健夫, 1986. ヤギヌマグモ科. 原色日本クモ類図鑑, p.20. 保育社, 大阪.  
 新海栄一, 2006. ヤマトヤギヌマグモ. 日本のクモ, p.28. 文一総合出版, 東京.  
 千国安之輔, 1989. ヤマトヤギヌマグモ. 写真日本クモ類大図鑑, p.26, p.170. 偕成社, 東京.

（執筆者 緒方清人）

## ユノハマヒメグモ *Yunohamella yunohamensis* (Bösenberg et Strand)

### 【選定理由】

愛知県では、山地に分布する。湿潤な崖地や苔むした樹幹の表面に生息する。そのために生息地は限られ、且つ個体数は少ない。近年、生息域の開発や乾燥化等の影響を受け、徐々に減少傾向にある。岡崎市では、石原町の極限られた崖地のみ生息する。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	リスト外

### 【形態】

体長雌 4~7.6mm。雄 3~4mm。背甲は明褐色で中窩から頭部にかけて黒褐色。腹部は淡色ないし茶褐色。中央に白色で縁どられた赤色の菱形模様が顕著。個体により、この赤色に濃淡がある。さらに、末端にかけて白色斑と中央から数本の白色条が放射状にある。雄は腹部が細く、菱形模様も不明瞭で赤色を欠く。脚は4対とも黄褐色で、腿節、膝節、脛節、蹠節、附節に黒色の環紋がある(吉田, 2009)。卵のうは茶褐色の糸で紡がれている。



岡崎市石原町, 2009年6月20日, 緒方清人 撮影

### 【分布の概要】

日本では、本州・四国・九州に分布する(吉田, 2009)。愛知県では、豊田市(旧豊田市・旧足助町)・新城市(旧鳳来町)・北設楽郡設楽町・北設楽郡豊根村(旧富山村)に分布する。本市では石原町(旧額田町)に分布する。

### 【生息地の環境/生態的特性】

県内で生息が確認された環境は、湿潤な崖地や苔むした樹幹の表面等である。本市では闇苧溪谷の歩道沿いの崖地のみ生息し、壁面に不規則網を張っている。5月ごろから成熟し、雄は、雌の網に侵入し交配をおこなう。雌は網の中に卵のうを1~3個作り、ふ化から分散まで一緒に過ごす。幼体で越冬する。

### 【現在の生息状況/減少の要因】

本市では石原町の闇苧溪谷のみ確認された。初認は2009年7月26日である。その後、2011年まで毎年生息を確認している。年により個体数に増減は生じるが、2009年7月26日は雌9頭、2010年8月8日は雌3頭、2010年9月18日は雌7頭、2011年7月5日は11頭であった。当然、見落としもあると思われるので、推定だが20頭ほどは生息していると思われる。このように、湿った崖地を好み生息しているので、生息域での開発による環境破壊は、大きく減少につながる恐れがある。

### 【保全上の留意点】

前述したアケボノユレイグモと同じ環境に生息しているので、保全対策も崖地の工事は最小限にとどめ保全に努めることが望まれる。乾燥化を防ぐために、後背地の森林を含めた広範囲な保全対策も望まれる。

### 【特記事項】

本種が生息する崖地には同科のオオヒメグモ(*Parasteatoda tepidariorum*)が生息している。体形は似るが、腹部背面に赤色の菱形模様はなく褐色・黒色・白色の複雑な模様をしているので識別は容易である。また、アシナガグモ科のヤマジドヨウグモ(*Neta reticuloides*)・オオシロカネグモ(*Leucauge celebesiana*)、カラカラグモ科のカラカラグモ(*Theridiosoma epeiroides*)・ヤマジグモ(*Ogulius pullus*)など生息するが、どの種とも色彩や体形が違うので識別は容易である。

### 【引用文献】

吉田 哉, 2009. ヒメグモ科. 日本産クモ類, pp.356-393. 東海大学出版会, 東京.

### 【関連文献】

八木沼健夫, 1986. ヒメグモ科. 原色日本クモ類図鑑, pp.32-53. 保育社, 大阪.  
 新海栄一, 2006. ユノハマヒメグモ. 日本のクモ, p.120. 文一総合出版, 東京.  
 千国安之輔, 1989. ユノハマヒメグモ. 写真日本クモ類大図鑑, p.42, p.185. 偕成社, 東京.

(執筆者 緒方清人)

クモ類 014	クモ目 コガネグモ科	岡崎市 絶滅危惧Ⅱ類
<b>ニシキオニグモ <i>Araneus variegatus</i> Yaginuma</b>		

**【選定理由】**

愛知県では、海岸近くの丘陵地から山地に分布する。建物の壁面や林縁部で記録されるが、どの地域においても個体数は少ない。特に、林縁部は開発等で減少傾向にある（愛知県環境調査センター, 2009）。岡崎市では石原町と桑谷町で記録されたが、生息域はきわめて狭く、且つ個体数も1~2頭と少ない。

県・国の評価区分	
愛知県	絶滅危惧Ⅱ類
環境省	リスト外

**【形態】**

体長雌 12~18mm。雄 9~10mm。背甲は黒褐色で側縁と放射溝は淡褐色。腹部背面は淡褐色ないし灰褐色。前方に淡黄色の山形斑と、中央から末端にかけて淡黄色に縁どられた黒褐色の波形模様が顕著である。腹部下面の外雌器の下方に赤色斑が目立つ。4脚は淡褐色で各腿節、膝節、脛節、蹠節、跗節は黒灰色である。雄の背甲は黒褐色で側縁は淡褐色。腹部背面は濃褐色ないし灰黒色で、中央から末端にかけて淡色に縁どられた黒褐色の波形模様がある。脚は4対とも濃褐色で脛節、蹠節に淡白色の環紋がある（谷川, 2009）。



岡崎市石原町, 2010年4月30日, 緒方清人 撮影

**【分布の概要】**

日本では北海道・本州・四国・九州に生息する。愛知県では、豊田市（旧豊田市・旧藤岡町・旧稲武町）北設楽郡設楽町に分布する。本市では桑谷町（旧岡崎市）・石原町（旧額田町）に分布する。

**【生息地の環境／生態的特性】**

県内で生息が確認された環境は、林縁部や建物の壁面である。日中は網の端に移動し枝や葉裏等に潜んでいるが、夜間は垂直円網を張り網の中心部に静止している。夏期に成体になり、雄は雌を求めて徘徊するようになる。卵のうは未確認であるが、幼体で越冬する。

**【現在の生息状況／減少の要因】**

本市では石原町と桑谷町で述べ4回記録された。初記録は2007年9月9日の石原町本宮山山頂付近で雌幼体1頭である（愛知県環境調査センター, 2009）。2010年4月30日に同町闇苧溪谷の入り口付近で、雌1頭を確認した。桑谷町扇子山では2007年10月に雌が撮影されたと杉山時雄氏から伺った。筆者は2008年10月5日に同地で雌3頭、2009年9月21日に雄幼体1頭を確認した。山頂の展望台付近の赤松林は、毎年生息が確認される貴重な環境であったが、残念なことに、2009年度にまさに生息地に防災無線用の鉄塔が建設された。その工事の影響で生息環境が大きく変化し、2010年以降は確認されていない。県内で確認されたどの地域においても、極めて狭い範囲に生息しているため、生息域での伐採や工事等の影響が減少の要因となっている。

**【保全上の留意点】**

県内では平地の丘陵地から山間部まで、散発的に記録されている。どの地域においても確認数は1~3頭と極めて個体数は少ない。観察記録のデータは少ないが、里山や低山の集落周辺の林縁部や神社仏閣の境内で確認されている例が多いので、生息域の保全対策が望まれる。

**【引用文献】**

愛知県環境調査センター（編）, 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち2009-動物編-, p.437.  
愛知県環境部自然環境課, 名古屋.  
谷川明男, 2009. コガネグモ科. 日本産クモ類, pp.420-463. 東海大学出版会, 東京.

**【関連文献】**

八木沼健夫, 1986. コガネグモ科. 原色日本クモ類図鑑, pp.91-125. 保育社, 大阪.  
新海栄一, 2006. ニシキオニグモ. 日本のクモ, p.189. 文一総合出版, 東京.  
千国安之輔, 1989. ニシキオニグモ. 写真日本クモ類大図鑑, p.66, p.205. 偕成社, 東京.

（執筆者 緒方清人）



シロオビトリノフンダマシ *Cyrtarachne nagasakiensis* Strand

## 【選定理由】

愛知県では、平野部から山地にかけて広く分布する。主に林縁部に生息するために、道路拡張工事や宅地開発等の影響を受けて、近年は減少傾向にある（愛知県環境調査センター，2009）。岡崎市では10町から記録されているが、いずれも生息数は1～3頭と少ない。

県・国の評価区分	
愛知県	絶滅危惧Ⅱ類
環境省	リスト外

## 【形態】

体長雌 5～8mm。雄 1～2mm。雌の背甲は濃褐色。シロオビ形の腹部は茶褐色で前方に白色の太い横向きの帯模様が特徴となる。後方の中央に灰褐色模様があり、さらに末端は黄褐色となる。脚の各節は赤褐色で環紋はない。雄の背甲は黒褐色で、多数の凹点がある。腹部は濃褐色で後方は白色。腹部背面に黒色の顆粒が10数個あり、多数の凹点がある。第1脚、第2脚の脛節、蹠節、跗節の側面に刺毛列がある（谷川，2009）。



岡崎市生平町，2008年8月2日，緒方清人 撮影

## 【分布の概要】

日本では、本州・四国・九州・南西諸島に分布する（谷川，2009）。愛知県では、名古屋市・瀬戸市・東海市・常滑市・豊明市・日進市・豊田市（旧豊田市・旧藤岡町・旧足助町・旧下山村）・額田郡幸田町・豊川市（旧豊川市・旧音羽町・旧御津町）・北設楽郡設楽町・新城市（旧鳳来町）に分布する。本市では真伝町・八ツ木町・駒立町・奥殿町・小呂町・池金町・生平町（全て旧岡崎市）・樫山町・須淵町・淡淵町（全て旧額田町）に分布する。

## 【生息地の環境／生態的特性】

県内で生息が確認された環境は、丘陵地、里山、山地などの林縁部や草地である。昼間は広葉樹、笹、イネ科植物などの葉裏に静止し、夜間になる同心円状円網を張る。横糸の粘球は強く、よくガ類が掛りそれを捕食しているのが観察される。7～8月に成体になり、夜間、雄は雌の網に侵入し交接する。卵のうは細長い紡錘形だが、発見例は少ない。初春にビーティングやシフティングで幼体が獲られるが、卵で越冬するのか、幼体で越冬するのかは、詳しく調べられていない。

## 【現在の生息状況／減少の要因】

本市では村上（1960）によって初報告されたが、産地は不明である。筆者は10町から記録しているが、どの地域においても毎年記録されるのではなく散発的である。もっとも古い記録は1990年7月20日の真伝町で雌1頭である。観察例の多い地域としては八ツ木町（自然体験の森）で、2003年7月8日、2003年7月20日、2005年6月25日、2005年8月2日の述べ4回のいずれも雌1頭であった。その後の2回の調査では確認されていない。真伝町は宅地になり生息地は消滅した。駒立町は確認されていない。減少の要因としては、林縁部の伐採や草刈り等による影響と思われる。

## 【保全上の留意点】

生息地での開発、伐採、農薬の散布などは減少の要因になるので、環境の保全が望まれる。

## 【特記事項】

本種の雌は色彩変異があり、黒色形をクロイトリノフンダマシ (*C.nigra*) とされていたが、谷川（2001）の研究により新産シノニムになった。また、腹部背面の中央に白色の太い帯が本種の特徴となっているが、黄褐色や淡褐色などが混ざった不明瞭な個体も多い。

## 【引用文献】

- 愛知県環境調査センター（編），2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2009-動物編，p.438.  
愛知県環境部自然環境課，名古屋.  
村上 勝，1960. 岡崎市のクモ. 謄写印刷.  
谷川明男，2009. コガネグモ科. 日本産クモ類，pp.420-463. 東海大学出版会，東京.  
Akio TANIKAWA，2001. Two new synonymies of the spider genus *Cyrtarachne* (Araneae:Araneidae) Acta Arachnologica, 50 (1): 87-89.

## 【関連文献】

- 八木沼健夫，1986. コガネグモ科. 原色日本クモ類図鑑，pp.91-125. 保育社，大阪.  
新海栄一，2006. シロオビトリノフンダマシ. 日本のクモ，p.163. 文一総合出版，東京.  
千国安之輔，1989. シロオビトリノフンダマシ. 写真日本クモ類大図鑑，p.82, p.216. 偕成社，東京.

（執筆者 緒方清人）

クモ類 016	クモ目 コガネグモ科	岡崎市 絶滅危惧Ⅱ類
<b>アカイロトリノフンダマシ <i>Cyrtarachne yunoharuensis</i> Strand</b>		

**【選定理由】**

愛知県では、平野部から山地にかけて広く分布する。主に林縁部に生息するので、道路拡張工事や宅地開発等の影響を受けて、近年、減少傾向にある（愛知県環境調査センター, 2009）。岡崎市では大柳町・池金町・淡淵町・小呂町で記録されているが、いずれも 1~3 個体と少ない。

県・国の評価区分	
愛知県	絶滅危惧Ⅱ類
環境省	リスト外

**【形態】**

体長雌 4.5~7mm。雄 1.5~2mm。雌の背甲は赤褐色。アカイロ形の腹部は淡赤褐色で、両端に 1 対の黒点と十数個の白色の斑紋が顕著である。一見するとテントウムシに似る。脚の各節は赤褐色で環紋はない。雄の背甲は濃茶褐色で、多数の凹点がある。腹部は赤褐色で後方は白色。腹部背面に濃茶褐色の顆粒が 10 数個あり、多数の凹点がある。第 1 脚、第 2 脚の脛節、蹠節、跗節の側面に刺毛列がある（谷川, 2009）。前種の雄と極めて酷似する。



岡崎市池金町, 2011 年 8 月 9 日, 緒方清人 撮影

**【分布の概要】**

日本では、本州・四国・九州に分布する（谷川, 2009）。愛知県では、名古屋市・犬山市・瀬戸市・日進市・豊田市（旧豊田市・旧藤岡町・旧足助町・旧下山村）・額田郡幸田町・豊川市（旧豊川市・旧音羽町）・北設楽郡設楽町・新城市（旧鳳来町）に分布する。本市では大柳町・小呂町・池金町（全て旧岡崎市）・淡淵町（旧額田町）に分布する。

**【生息地の環境／生態的特性】**

県内で生息が確認された環境は、丘陵地、里山、山地などの林縁部や草地であるが、平野部では少ない。日中は笹やイネ科植物などの葉裏に静止し、夜間になる同心円状円網を張る。7~8 月に成体になり、夜間、雄は雌の網に侵入し交接する。前種と生息環境や生態等は似ているが、個体数は本種が少ない。

**【現在の生息状況／減少の要因】**

本市では 4 町から記録している。観察例を列举すると、初記録は 1992 年 8 月 26 日の大柳町で雌 3 頭である。2009 年 7 月 18 日に淡淵町で雌 1 頭、2010 年 7 月 22 日に池金町で雌 1 頭、2010 年 9 月 9 日に池金町で雌 1 頭、2011 年 7 月 21 日に小呂町で雌 1 頭の 4 町述べ 5 回記録された。本市での主な生息環境は林縁部の草本類や竹類が自生している所である。シロオビトリノフンダマシ同様に日中は葉裏に静止している。本種は特にススキやササなどを好む傾向にあるので、草刈りや除草剤の散布等により、減少につながる最大の要因となっている。

**【保全上の留意点】**

本種は林縁部の草地や果樹園の下草等の、イネ科やササ類等が自生する環境を好んで生息する。このような環境は、開発、伐採、農薬の散布などが実地されやすく、直接減少の要因になるので、環境の保全が望まれる。

**【特記事項】**

本種の雌は色彩変異があり、腹部背面が黒色や赤色と黒色の中間色も記録される。また、前方が黒色で後方が赤色はソメワケ形と呼ばれている。県内ではソメワケ形は稀で、1995 年 8 月 11 日に瀬戸市海上町で、筆者が雌 1 頭を記録しただけである。ソメワケ形はソメワケトリノフンダマシ (*C.induta*) と別種にされていたが、本種のシノニムにされた（谷川, 2001）。

**【引用文献】**

愛知県環境調査センター(編), 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2009-動物編-, p.439. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.  
 谷川明男, 2009. コガネグモ科. 日本産クモ類, pp.420-463. 東海大学出版会, 東京.  
 Akio TANIKAWA, 2001. Two new synonymies of the spider genus *Cyrtarachne* (Araneae:Araneidae) Acta Arachnologica, 50 (1): 87-89.

**【関連文献】**

八木沼健夫, 1986. 原色日本クモ類図鑑, p.44, p.165. 保育社, 大阪.  
 新海栄一, 2006. アカイロトリノフンダマシ. 日本のクモ, p.163. 文一総合出版, 東京.  
 千国安之輔, 1989. アカイロトリノフンダマシ. 写真日本クモ類大図鑑, p.82, p.216. 借成社, 東京.

(執筆者 緒方清人)

トゲグモ *Gasteracantha kuhli* C. L. Koch

## 【選定理由】

愛知県では、山地に広く分布する。稀に一地域に十頭ほど記録されるが、多くは1~3頭ほどである（愛知県環境調査センター，2009）。岡崎市では1980年に百々町で1回記録された（野沢，1985）。

県・国の評価区分	
愛知県	絶滅危惧Ⅱ類
環境省	リスト外

## 【形態】

体長雌6~8mm。雄3~4mm。雌の背甲は黒色。腹部は白色で後方は淡色。10個ほどの黒色斑紋があり、側縁3対の太い刺が顕著である。脚は4対とも腿節は黒色。膝節、脛節、蹠節は褐色で、黒色の環紋がある。雄の背甲は黒色。腹部は馬蹄形で白地に黒い斑紋があり。突起は目立たない（谷川，2009）。



豊田市伊熊町，2012年9月2日，緒方清人 撮影

## 【分布の概要】

日本では、本州・四国・九州・南西諸島に分布する（谷川，2009）。愛知県では、豊田市（旧足助町・旧小原村・旧旭町・旧稲武町）・豊橋市・新城市（旧新城市・旧鳳来町）・北設楽郡設楽町に分布する（愛知県環境調査センター，2009）。本市では、百々町（旧岡崎市）で板倉氏が1981年に記録した（野沢，1985）。

## 【生息地の環境／生態的特性】

県内で生息が確認された環境は、祠の境内や林縁部である。分布は三河地方に限られているが、生息地によっては一度に数頭が記録されるので、やや集団的な要素があるように思われる。8月ごろに成熟し、雌は10月下旬ごろまで観られる。雄の観察例は少ない。枝葉間に水平円網を張り、中心部に静止している。卵のうは樹幹や竹などの表面に付着させる。

## 【現在の生息状況／減少の要因】

本市では百々町で発見された（野沢，1985）。本市ではこの記録のみである。筆者は豊田市・新城市・北設楽郡設楽町のいずれも山間部で記録している。本記録は県内におけるもっとも標高が低く、且つ市街地に近い記録である。本種は林縁部や林内の枝葉間に垂直円網を張り、網の中心部に静止している。豊田市では生息地での杉林が伐採されたことで、確認されなくなった地域もある。減少の要因は森林伐採による影響が大きいと思われる。

## 【保全上の留意点】

本種は林縁部や林内の地上1~3mの枝葉間に垂直円網を張ることが多い。発見時の個体数は1~2頭だが、まれに10頭ほどが集団的に記録されることがある。生息地での環境を保全するために、過度な伐採を控えるなど、慎重な配慮が望まれる。

## 【特記事項】

コガネグモ科で本種に似たクモは見当たらないので、識別は容易である。体形が似ているチブサトゲグモ (*Ahelacantha brevispina*) は南西諸島に分布する。

## 【引用文献】

- 愛知県環境調査センター(編)，2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち2009-動物編-，p.440. 愛知県環境部自然環境課，名古屋.  
 谷川明男，2009. コガネグモ科. 日本産クモ類，pp.420-463. 東海大学出版会，東京.  
 野沢孝之朗，1985. 岡崎市のクモ. 新編岡崎市史自然14，pp.1178-1200. 新編岡崎市史編さん委員会，岡崎.

## 【関連文献】

- 八木沼健夫，1986. コガネグモ科. 原色日本クモ類図鑑，pp.91-125. 保育社，大阪.  
 新海栄一，2006. トゲグモ. 日本のクモ，p.228. 文一総合出版，東京.  
 千国安之輔，1989. トゲグモ. 写真日本クモ類大図鑑，p.83，p.217. 偕成社，東京.

(執筆者 緒方清人)



クモ類 018	クモ目 コモリグモ科	岡崎市 絶滅危惧Ⅱ類
<b>カワベコモリグモ <i>Arctosa kawabe</i> Tanaka</b>		

**【選定理由】**

愛知県では、極めて限られた河川上流に分布する。特異な環境に生息するだけに、いずれの地域も生息数は極めて少ない。生息域の河川工事等で減少傾向にある。岡崎市では石原町で記録された。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	リスト外

**【形態】**

体長雌 7.8~13.5mm。雄 6.4~9.5mm。背甲雌雄とも灰褐色で頭部と放射溝は灰黒褐色。腹部は雌雄とも灰茶褐色で、淡色の斑紋が多数ある。雄の心斑は淡色で明瞭だが、雌はかすかに分かる程度である。脚は 4 対とも淡褐色ないし乳白色で、腿節、膝節、脛節、蹠節に灰黒褐色の環斑がある。また、各節に太い刺を有する。胸板は灰黄色で、中央上半分に細い淡黄色斑がみられる（田中, 2009）。



岡崎市石原町, 2010年9月18日, 緒方清人 撮影

**【分布の概要】**

日本では、北海道・本州・四国・九州に分布する（田中, 2009）。愛知県では、北設楽郡設楽町・新城市（旧鳳来町）・豊根村（旧富山村）に分布する。本市では、石原町（旧額田町）に分布する。

**【生息地の環境／生態的特性】**

県内で生息が確認された環境は、山間部の溪流である。それも三河地方の極限られた河川に生息する。溪流沿いの所々に拳大の石がたくさんある。狭い面積だが、このような環境に限り生息している。どの生息地においても、個体数は非常に少ない。生態は前述したイサゴコモリグモと同じく、普段は石の表面を徘徊しているが、警戒すると石の下や隙間に潜り込み身を隠す。

**【現在の生息状況／減少の要因】**

本市で生息が確認されたのは、石原町闇苧溪谷で、岸辺の小石の間を徘徊している。初記録は 2010 年 9 月 18 日の雌 1 頭で、次は 2011 年 7 月 5 日の雄 1 頭である。生息域での本種に適した環境は極限られているので、生息数は極めて少ないと思われる。

**【保全上の留意点】**

闇苧溪谷は本宮山県立自然公園に指定されているので、生息地の開発や種の採集圧等の影響は少ないと思われる。しかし、生息範囲が猿飛橋の下流部に限られるので、その間での河川工事は注意が必要である。

**【特記事項】**

ミズコモリグモ属 (*Arctosa*) で、山地の溪流に生息する種は本種だけである。このような環境には同科のクラークコモリグモ (*Piratula clercki*)、キシダグモ科アオグロハシリグモ (*Dolomedes raptor*)、サシアシグモ科シノビグモ (*Shinobius orientalis*) なども生息しているが、体形や体色の違いで識別は容易である。

**【引用文献】**

田中穂積, 2009. コモリグモ科. 日本産クモ類, pp.222-248. 東海大学出版会, 東京.

**【関連文献】**

八木沼健夫, 1986. コモリグモ科. 原色日本クモ類図鑑, pp.158-170. 保育社, 大阪.  
 新海栄一, 2006. カワベコモリグモ. 日本のクモ, p.62. 文一総合出版, 東京.  
 千国安之輔, 1989. カワベコモリグモ. 写真日本クモ類大図鑑, p.111, p.241. 偕成社, 東京.

(執筆者 緒方清人)

クモ類 019	クモ目 コモリグモ科	岡崎市 絶滅危惧Ⅱ類
<b>ミナミコモリグモ <i>Piratula meridionalis</i> (Tanaka)</b>		

**【選定理由】**

愛知県では平地から山地に分布する。生息域の湿潤地や湿地の開発等で減少傾向にある。特に、湿潤地は宅地開発等の影響を受けやすく、既に絶滅した地域もある（愛知県環境調査センター, 2009）。岡崎市では大柳町・八ツ木町・東阿知和町・小呂町・池金町で記録された。

県・国の評価区分	
愛知県	絶滅危惧Ⅱ類
環境省	リスト外

**【形態】**

体長雌 4.8~5.7mm。雄 3.7~4.5mm。雌雄とも、背甲は淡褐色で褐色の模様と、中窩から頭部の後側眼に向かって褐色の V 字模様がある。腹部は灰褐色ないし灰黒色で、3~4 対の白色の斑紋がある。心斑は目立たない。脚は 4 対とも淡褐色で、腿節、脛節、蹠節に淡灰色の環紋があるが目立たない（田中, 2009）。



岡崎市小呂町, 2011年5月13日, 緒方清人 撮影

**【分布の概要】**

日本では、本州・四国・九州・南西諸島に分布する（田中, 2009）。愛知県では、弥富市（旧弥富町）・名古屋市・東海市・豊明市・日進市・知立市・豊田市（旧豊田市・旧足助町・旧藤岡町・旧小原村）・豊橋市・新城市（旧鳳来町）・北設楽郡設楽町に分布する。本市では、大柳町・池金町・東阿知和町・八ツ木町・小呂町（全て旧岡崎市）に分布する。

**【生息地の環境／生態的特性】**

県内で生息が確認された環境は、平地、丘陵地、里山、山地等の湿地や湿潤な草地である。乾燥しているような環境には生息していない。6~7月に成体になり、10月ごろまで見られる。前述したイサゴコモリグモやキンベコモリグモと同じように、雌は卵のうを糸器につけて徘徊する。ふ化した子グモは母グモの背中に這い上がり、集団になり1週間ほど過ごした後分散し、幼体で越冬する。コモリグモ科は属により卵のうを紡ぐ糸の色にちがいがり、本種を含むカイゾクコモリグモ属は純白である。

**【現在の生息状況／減少の要因】**

本市で生息が確認された大柳町は、工場が建設されたために生息地は消滅した。東阿知和町はその後未調査で、現在の生息状況は不明である。八ツ木町（自然体験の森）、小呂町（小呂湿地）、池金町（北山湿地）では現在も生息している。いずれの地域も、自然環境保全地域に指定されているので、環境が保全されれば、個体数は維持されると思われる。

**【保全上の留意点】**

本種は湿地、池沼、湿潤地に好んで生息する。生息域を保全するには、水源や林など周辺部の環境も保全対策に取り入れ、生息域の乾燥化を防ぐ対策が望まれる。

**【特記事項】**

カイゾクコモリグモ属 (*Pirata*) は体形も色彩も酷似し、野外での識別は要注意である。特に、クラークコモリグモ (*Pclercki*)、ナミコモリグモ (*Pyaginumai*)、イモコモリグモ (*Ppiratoides*)、ハテコモリグモ (*Pboreus*) に対しては困難と言っても過言ではない。顕微鏡によって雌雄の生殖器などを精査するが、それでも注意を要する。但し、種によって生息環境を棲み分けているので、ある程度の種類は想定できる。本種は池や沼の岸边、湿地、湿潤地などに限って生息する。

**【引用文献】**

愛知県環境調査センター(編), 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2009-動物編-, p.441.  
愛知県環境部自然環境課, 名古屋.  
田中穂積, 2009. コモリグモ科. 日本産クモ類, pp.222-248. 東海大学出版会, 東京.

**【関連文献】**

八木沼健夫, 1986. コモリグモ科. 原色日本クモ類図鑑, pp.158-170. 保育社, 大阪.  
新海栄一, 2006. ミナミコモリグモ. 日本のクモ, p.73. 文一総合出版, 東京.  
千国安之輔, 1989. ミナミコモリグモ. 写真日本クモ類大図鑑, p.114, p.244. 偕成社, 東京.

(執筆者 緒方清人)

オビジガバチグモ *Castianeira shaxianensis* Gong

## 【選定理由】

愛知県では主に平地に分布する。いずれの地域においても、個体数は少ない。生息地が河川敷や草原で土地開発等の影響を受けやすく、既に絶滅した地域もある（愛知県環境調査センター編，2009）。岡崎市では真伝町・岩中町・鉢地町で記録された。

県・国の評価区分	
愛知県	絶滅危惧Ⅱ類
環境省	リスト外

## 【形態】

体長雌 7.0～8.7mm。雄 6.5～7mm。雌雄とも背甲は灰黒色で、放射溝に白毛を有する。腹部は灰色で前方に黒色の斑紋と後方に太い横向きの黒帯がある。脚は4対とも黒褐色だが、第1・2脚の腿節と3・4脚の腿節、膝節、脛節、蹠節の上面2条の黄色の毛がある（加村，2009）。



岡崎市鉢地町，2001年5月6日，緒方清人 撮影

## 【分布の概要】

日本では、本州・四国・九州に分布する（加村，2009）。愛知県では、名古屋市・常滑市・刈谷市・知立市・豊川市（旧音羽町）・豊橋市に分布する。

## 【生息地の環境／生態的特性】

県内で生息が確認された環境は、平地から里山にかけての河川敷、農耕地、草原等である。徘徊性で動きが俊敏で見失うこともある。体形は細身で名の由来となるジガバチより、クロヤマアリやクロオオアリなどのアリ類に一瞬見間違える場合がある。6～8月に成体になるが、産卵時期や卵のうなど、生態はよく調べられていない。

## 【現在の生息状況／減少の要因】

本市での記録は以下の3例である。初記録は1990年12月14日に真伝町で幼体1頭を確認した。2例目は1991年6月30日に岩中町で雌幼体1頭を確認した。3例目は2001年5月6日に鉢地町で雌幼体1頭を確認した。このように個体数は極めて少ない。既に真伝町と岩中町は宅地造成や道路拡張工事等で生息域が消滅したので、絶滅したものと思われる。鉢地町は発見から11年が経過しているので、現在の生息状況は不明である。

## 【保全上の留意点】

本種の生息環境は河川敷、草原、農耕地などである。宅地造成や道路拡張などの開発が行われやすい環境にある。県内ではこのような開発が相次いで行われ、生息域が消滅した地域も存在する。生息域の保全は難しいと思われるが、草地を残すなどの最大限の配慮が望まれる。また、除草剤や農薬の散布は極力避けるべきである。

## 【特記事項】

日本では1属1種である（加村，2009）。他科の中でも似た種は見当たらないので識別は容易である。雌は成体の外雌器は特徴のある2つの開口部からなる。千国安之輔著『写真日本クモ類大図鑑』（1985）による外雌器の写真是、そのような形にはなっていないように見えるので、幼体もしくは亜成体ではないかと思われる。

## 【引用文献】

愛知県環境調査センター（編），2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち2009-動物編-，p.442.  
愛知県環境部自然環境課，名古屋.  
加村隆英，2009. ネコグモ科. 日本産クモ類，pp.551-557. 東海大学出版会，東京.

## 【関連文献】

八木沼健夫，1986. ジガバチグモ属. 原色日本クモ類図鑑，p.184. 保育社，大阪.  
新海栄一，2006. オビジガバチグモ. 日本のクモ，p.268. 文一総合出版，東京.  
千国安之輔，1989. オビジガバチグモ. 写真日本クモ類大図鑑，p.128, p.259. 偕成社，東京.

（執筆者 緒方清人）



アシナガカニグモ *Heriaeus melloteei* Simon

## 【選定理由】

愛知県では平地から里地に分布する。生息地が林縁部や草原で、多産する地域もあるが、このような生息地は稀である。多くの生息地は土地開発等の影響を受けやすく、減少傾向にある（愛知県環境調査センター編，2009）。岡崎市では奥殿町で記録された。

県・国の評価区分	
愛知県	絶滅危惧Ⅱ類
環境省	リスト外

## 【形態】

体長雌 6~7.6mm。雄 4.5~4.9mm。雌雄とも背甲は黄緑色で中央に白色の条がある。腹部は黄緑色だが、背甲より黄味が強い。前縁から後縁にかけて八字に白色の条がある。また、後方に 2~3 の白色の横縞がある。脚は 4 脚とも黄緑色で、雄は脛節と蹠節の先端が赤褐色である。また、第 1 脚、第 2 脚が雌よりもはるかに細長い、雌雄とも全身に長い白毛が生えている（小野，2009）。



岡崎市奥殿町，2010年7月4日，緒方清人 撮影

## 【分布の概要】

日本では、本州・四国・九州に分布する。愛知県では、豊田市（旧豊田市・旧足助町）・新城市（旧新城市・旧鳳来町）に分布する。本市では、奥殿町（旧岡崎市）に分布する。

## 【現在の生息状況／減少の要因】

本市での記録は以下の 2 例である。初記録は野沢（1985）によって報告されたが、現在の生息状況は不明である。筆者は 2010 年 7 月 4 日に奥殿町の農耕地周辺の草原で 1 雌を確認した。本種は徘徊性で、特に大型草本類のヨモギやセイタカアワダチソウなどが生えている環境を好む傾向が強い。奥殿町でもセイタカアワダチソウの茎に静止する個体を発見した。本市ではこの記録のみと非常に少ないが、隣接する豊田市では数ヶ所から記録されている。特に、本市と豊田市の境界を流れる郡界川の豊田市加茂川町では毎年数 10 頭が確認される。しかし、他の地域では宅地造成や道路拡張工事等で減少傾向にある。生息域の草原等の開発が減少要因となっている。

## 【保全上の留意点】

本種は草原を好んで生息する。このような環境は宅地造成や道路拡張等の工事が行われやすいので、生息域が一瞬にして消滅する可能性が高い。生息域の保全は簡単ではないと思われるが、最大限の配慮が望まれる。また、除草剤や農薬の散布は禁止すべきである。

## 【特記事項】

アシナガカニグモは 1 属 1 種で日本特産種である（小野，2009）。本種が好む環境には同科のハナグモ（*Ebrechtella tricuspидata*）とコハナグモ（*Diaea subdola*）が生息している。両種とも体色は黄緑色をしているが、ハナグモは腹部に茶褐色の模様があり、コハナグモは茶褐色や黒色の斑点がある。また、全身に白毛は生えていないので識別は容易である。

## 【引用文献】

- 愛知県環境調査センター（編），2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2009・動物編，p.444. 愛知県環境部自然環境課，名古屋。  
野沢孝之朗，1985. 岡崎市のクモ. 新編岡崎市史自然 14, pp.1178-1200. 新編岡崎市史編さん委員会，岡崎。  
小野展嗣，2009. カニグモ科. 日本産クモ類, pp.501-531. 東海大学出版会，東京。

## 【関連文献】

- 八木沼健夫，1986. カニグモ科. 原色日本クモ類図鑑, pp.201-220. 保育社，大阪。  
新海栄一，2006. アシナガカニグモ. 日本のクモ, p.253. 文一総合出版，東京。  
千国安之輔，1989. アシナガカニグモ. 写真日本クモ類大図鑑, p.115, p.246. 偕成社，東京。

（執筆者 緒方清人）

オビボソカニグモ *Xysticus trizonatus* Ono

## 【選定理由】

愛知県では平地から里地に分布する。どの地域においても、個体数は少ない。普段は樹幹を徘徊しているが、松のコモ巻き内で越冬する個体や落葉層からも発見される。生息域での伐採等の影響で減少傾向にある（愛知県環境調査センター編，2009）。岡崎市では康生町・石原町で記録された。

県・国の評価区分	
愛知県	絶滅危惧Ⅱ類
環境省	リスト外

## 【形態】

体長雌 5～8mm。雄 4～5mm。背甲中央部は黄褐色で頭部が茶褐色ないし褐色。側縁にかけて濃茶褐色ないし黒褐色。腹部は茶褐色で黄褐色、黒褐色、白斑など複雑な模様となっている。脚は4脚とも茶褐色で腿節に黒点が密にある。1脚、第2脚の脛節と蹠節の下面に太い刺を有する。雄の背甲は黒色で中央が茶褐色。腹部は茶褐色で白色の細い横条が3～4本ある（小野，1988・2009）。



岡崎市康生町，1987年7月4日，緒方清人飼育個体撮影

## 【分布の概要】

日本では、北海道・本州・四国・九州に分布する（小野，1988・2009）。愛知県では名古屋市・豊田市（旧下山村）・知立市・安城市・北設楽郡設楽町・北設楽郡豊根村（旧豊根村）に分布する。本市では、康生町（旧岡崎市）・石原町（旧額田町）に分布する。

## 【生息地の環境／生態的特性】

県内で生息が確認された環境は、平地、里山、山地等の公園、街路樹、林内の落葉層である。日中は樹皮の隙間に潜んでいるので発見しづらいが、夜間は隙間から這い出て樹幹の表面で昆虫等の餌を待ち伏せているので、比較的探しやすい。しかし、どの生息地においても、個体数は少ない。幼体は樹皮下や落葉層で越冬するが、松のコモ巻きからも越冬個体が発見される。

## 【現在の生息状況／減少の要因】

本市での記録は以下の2例である。1例目は1987年2月21日に、岡崎城公園内での松のコモ巻き調査で8頭が発見された（緒方，2001）。この事実によりコモ巻き内で越冬することが明らかになった。2例目は2010年3月3日に石原町閨苧溪谷でリター層から越冬中の幼体2頭を確認した。本来は樹皮下やリター層で越冬すると思われる。松のコモ巻きの主な目的は松の害虫であるマツカレハの幼虫退治である。その習性を利用して秋期に取り付けて、春先に取り外して焼却する。松のコモ巻きの調査によると、昆虫やクモなど多種類が越冬していることが判明した（緒方，2001）。焼却により本種も含めた無害な生物も相当数犠牲になっているので、本来の目的であるマツカレハの幼虫のみを焼却する手段を、早急に考えるべきである。

## 【保全上の留意点】

松・スギ・ケヤキなどの大木の樹皮下に潜んでいるので、生息木の保存が望まれる。松のコモ巻き内で越冬していることが、知立市や安城市の調査でも確認された。個体数の少ないクモだけに、コモ巻きを焼却する前にマツカレハ以外の生物はその場で放つ方法などを早急にとることが望ましい。

## 【特記事項】

カニグモ属 (*Xysticus*) の雌はどの種も腹部背面が一様に茶褐色で酷似し、野外での識別には注意を要する。本種は黄茶色と明るい色彩をしているので本属の中では識別しやすいが、幼体は不明瞭なので注意を要する。同科のキハダカニグモ (*Bassiana decorata*) やコカニグモ (*Coriarachne fulvies*) も樹皮下に潜んでいるが、体形や色彩の違いにより識別は容易である。

## 【引用文献】

- H. ONO, 1988. A Revisional Study of the Spider Family Thomisidae (Arachnida, Araneae) Of Japan, National Science Museum, Tokyo. 252pp.  
 愛知県環境調査センター(編), 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2009-動物編-, p.445. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.  
 緒方清人, 2001. 岡崎公園内の真正クモ類. 岡崎市史研究, 23: 72-82.  
 小野展嗣, 2009. カニグモ科. 日本産クモ類, pp.501-531. 東海大学出版会, 東京.

## 【関連文献】

- 八木沼健夫, 1986. カニグモ科. 原色日本クモ類図鑑, pp.201-220. 保育社, 大阪.  
 千国安之輔, 1989. オビボソカニグモ. 写真日本クモ類大図鑑, p.145, p.272. 偕成社, 東京.  
 新海栄一, 2006. オビボソカニグモ. 日本のクモ, p.258. 文一総合出版, 東京.

(執筆者 緒方清人)

クモ類 023	クモ目 コガネグモ科	岡崎市 準絶滅危惧
<b>コガネグモ <i>Argiope amoena</i> L. Koch</b>		

**【選定理由・現在の生息状況】**

本市では駒立町・池金町・小呂町・保母町・千万町町・舞木町で確認されている。生息地の環境は林縁部周辺・池沼周辺・河川敷・農耕地などのガマ・ヨモギ・セイタカアワダチソウなどの大型草本類の生えている草地である。どの生息地においても個体数は少なく、単独か数頭である。近年、土地開発や道路拡張工事等で生息地が消滅した地域もあり、現在生息が確認されている地域では、草地の保存が望まれる。日本では、本州・四国・九州・伊豆諸島・薩南諸島・吐噶喇列島・奄美諸島・沖縄諸島に分布する（谷川, 2009）。愛知県では名古屋市・犬山市・常滑市・豊明市・知立市・豊田市・安城市・豊川市・豊橋市・新城市・北設楽郡などで確認されている。

県・国の評価区分	
愛知県	準絶滅危惧
環境省	リスト外

**【種の概要】**

体長雌 20~30mm。雄 5~7mm。雌の背甲は暗褐色で銀色の毛が多数生えている。腹部は黄色と褐色の幅広い模様がある。この斑紋の様子が同属の他種から見分けることができる（愛知県環境調査センター, 2009）。雄は一樣に茶褐色で雌のような模様はないので、同属のチュウガタコガネグモ (*A.boesenbergi*) とは酷似するので、識別には注意を要する。6~8月に成体になり、草間に大型垂直円網を張る。雌はこの時期に産卵し卵のうを作る。



岡崎市小呂町, 2012年6月9日, 緒方清人 撮影

**【引用文献】**

愛知県環境調査センター (編), 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2009・動物編-, p.446.愛知県環境部自然環境課, 名古屋.  
谷川明男, 2009. コガネグモ科. 日本産クモ類, pp.420-463. 東海大学出版会, 東京.

**【関連文献】**

八木沼健夫, 1986. コガネグモ科. 原色日本クモ類図鑑, pp.91-125. 保育社, 大阪.  
千国安之輔, 1989. コガネグモ. 写真日本クモ類大図鑑, p.79, p.213. 偕成社, 東京.  
新海栄一, 2006. コガネグモ. 日本のクモ, p.212. 文一総合出版, 東京.

(執筆者 緒方清人)

クモ類 024	クモ目 コガネグモ科	岡崎市 準絶滅危惧
<b>トリノフンダマシ <i>Cyrtarachne bufo</i> (Bösenberg et Strand)</b>		

**【選定理由・現在の生息状況】**

本市では岩津町・池金町・小呂町・岩中町・真伝町・真福寺町・天神山緑地・八ツ木町・大代町・大柳町・滝尻町・淡淵町・雨山町で確認されている。平野部の丘陵地や里山に広く分布し、林縁部周辺の草本類や木本類の混生する環境に生息している。どの生息地においても個体数は少なく、単独か数頭である。近年、宅地開発や道路拡張工事等で生息地が著しく減少している。生息環境の保存が望まれる。日本では、本州・四国・九州・薩南諸島に分布する（谷川, 2009）。愛知県では名古屋市・犬山市・瀬戸市・常滑市・豊明市・日進市・豊田市・豊川市・豊橋市・新城市・田原市・北設楽郡などで確認されている。

県・国の評価区分	
愛知県	準絶滅危惧
環境省	リスト外

**【種の概要】**

体長雌 8~10mm。雄 1~2.5mm。雌の背甲は明褐色で頭部は暗色。腹部は白色で前方は暗褐色、前方左右両側に1対の褐色の丸い斑紋がある（谷川, 2009）。同属の他種との見分けは容易である。雄は微小で一樣に茶褐色をしているので、同種とは思えないほどの違いがある。次種のオオトリノフンダマシ (*C.akirai*) の雄とは酷似するので、識別には注意を要する。6~8月に成体になり、日中は葉裏に静止し、夜間に同心円網を張る。餌の多くは蛾類である（愛知県環境調査センター, 2009）。



岡崎市小呂町, 2010年8月7日, 緒方清人 撮影

**【引用文献】**

愛知県環境調査センター (編), 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2009・動物編-, p.447.愛知県環境部自然環境課, 名古屋.  
谷川明男, 2009. コガネグモ科. 日本産クモ類, pp.420-463. 東海大学出版会, 東京.

**【関連文献】**

八木沼健夫, 1986. コガネグモ科. 原色日本クモ類図鑑, pp.91-125. 保育社, 大阪.  
千国安之輔, 1989. トリノフンダマシ. 写真日本クモ類大図鑑, p.82, p.215. 偕成社, 東京.  
新海栄一, 2006. トリノフンダマシ. 日本のクモ, p.162. 文一総合出版, 東京.

(執筆者 緒方清人)



クモ類 025	クモ目 コガネグモ科	岡崎市 準絶滅危惧
<b>オオトリノフンダマシ <i>Cyrtarachne akirai</i> Tanikawa</b>		

**【 選定理由・現在の生息状況 】**

本市では池金町・小呂町・岩中町・真伝町・天神山緑地・八ツ木町・大代町・檜山町・淡淵町・切山町で確認されている。平野部の丘陵地や里山に広く分布し、林縁部周辺の草本類や木本類の混生する環境に生息している。どの生息地においても個体数は少なく、単独か数頭である。近年、土地開発や林縁部の道路拡張工事や伐採等で生息地が著しく減少している。生息環境の保存が望まれる。日本では、本州・四国・九州・薩南諸島・奄美諸島・沖縄諸島に分布する(谷川, 2009)。愛知県では名古屋市・犬山市・瀬戸市・常滑市・豊明市・日進市・豊田市・豊川市・豊橋市・新城市・北設楽郡などで確認されている。

県・国の評価区分	
愛知県	準絶滅危惧
環境省	リスト外

**【 種の概要 】**

体長雌 10~13mm。雄 2~2.5mm。雌の背甲は褐色。腹部は黄色で前方両側に1対の褐色の丸い斑紋がある(谷川, 2009)。同属の他種との識別は容易である。雄は一樣に茶褐色で、前種と同じく同種とは思えないほどの違いがある。また、シロオビトリノフンダマシ(*C. nagasakiensis*)・アカイトトリノフンダマシ(*C. yunoharuensis*)も含めて、雄は酷似するので識別には注意を要する。6~8月に成体になり、日中は葉裏に静止し、夜間に同心円網を張る。餌の多くは蛾類である(愛知県環境調査センター, 2009)。



岡崎市切山町, 2009年7月19日, 緒方清人 撮影

**【 引用文献 】**

愛知県環境調査センター(編), 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2009・動物編, p.448. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.  
谷川明男, 2009. コガネグモ科. 日本産クモ類, pp.420-463. 東海大学出版会, 東京.

**【 関連文献 】**

八木沼健夫, 1986. コガネグモ科. 原色日本クモ類図鑑, pp.91-125. 保育社, 大阪.  
千国安之輔, 1989. オオトリノフンダマシ. 写真日本クモ類大図鑑, p.82, p.216. 偕成社, 東京.  
新海栄一, 2006. オオトリノフンダマシ. 日本のクモ, p.162. 文一総合出版, 東京.

(執筆 緒方清人)

クモ類 026	クモ目 コガネグモ科	岡崎市 準絶滅危惧
<b>ゲホウグモ <i>Polys illepidus</i> C. L. Koch</b>		

**【 選定理由・現在の生息状況 】**

本市では池金町・岩津町・岩中町・八ツ木町で確認されている。平野部の丘陵地や里山に広く分布し、林縁部周辺の木本類に生息している。生息地は局地的で個体数は非常に少なく、単独か数頭である。近年、林縁部の道路拡張工事や伐採等の開発で生息地が減少している。生息環境の保存が望まれる。日本では、本州・四国・九州・伊豆諸島・吐噶喇列島・奄美諸島・沖縄諸島・宮古諸島・八重山諸島に分布する(谷川, 2009)。愛知県では名古屋市・犬山市・常滑市・半田市・東海市・日進市・豊田市・豊橋市・新城市などで確認されている。

県・国の評価区分	
愛知県	準絶滅危惧
環境省	リスト外

**【 種の概要 】**

体長雌 12~16mm。雄 2~3mm。背甲は赤褐色から紫がかかった色で光沢がある。腹部は明褐色や暗褐色で白色の複雑な斑紋と大小様々な瘤があり、腹部の形態は様々な変異がある(谷川, 2009)。日中は樹幹の瘤の上や枝に静止し、見事にカムフラージュしている。夜間に非常に目の細かい垂直円網を張る(環境調査センター, 2009)。同属のツツゲホウグモ(*P. columnaris*)は本州・九州・奄美諸島・沖縄諸島・八重山諸島に分布するが、愛知県からは未記録である。ゲホウグモより腹部が細長く上方に突出している。



岡崎市池金町, 2011年9月8日, 緒方清人 撮影

**【 引用文献 】**

愛知県環境調査センター(編), 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2009・動物編, p.449. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.  
谷川明男, 2009. コガネグモ科. 日本産クモ類, pp.420-463. 東海大学出版会, 東京.

**【 関連文献 】**

八木沼健夫, 1986. コガネグモ科. 原色日本クモ類図鑑, pp.91-125. 保育社, 大阪.  
千国安之輔, 1989. ゲホウグモ. 写真日本クモ類大図鑑, p.81, p.215. 偕成社, 東京.  
新海栄一, 2006. ゲホウグモ. 日本のクモ, p.226. 文一総合出版, 東京.

(執筆 緒方清人)

アイチアリマネグモ *Solenysa ogatai* Ono

## 【選定理由・現在の生息状況】

愛知県岡崎市と豊田市で筆者が採集した標本を元に、2011年に小野展嗣博士により新種記載された(小野, 2011)。タイプ産地は岡崎市奥山田町(村積山)である。本市では安土町でも採集している。採集地での環境はスギ・ヒノキの人工林で、アオキやヒサカキなどの広葉樹も混生する林内である。林床はやや湿気があり、リター層のシフティングによる採集方法で得られた。このような環境は、県内各地に存在すると思われるが、きわめて局所的に分布している。このようなことから生息地での保全が望まれる。愛知県では犬山市・日進市・豊川市・新城市・北設楽町でも確認されている。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	リスト外

## 【種の概要】

体長雌雄 1.5~1.6mm、頭胸部は濃赤色、腹部は黄褐色で卵型。脚は橙色で細長い。主に雑木林や山林の落葉層に生息する。特に、針葉樹と広葉樹の混生林からの採集例が多い。サラグモ科特有の皿網は確認されていないが、地表に堆積した枝葉間の、僅かなすき間に皿網も張っているものと思われる。成体は周年採集されるので、年多過性と思われる。

国内からは以下の3種が既知されている。アリマネグモ (*S.mellottei*) が関東地方に、カンサイアリマネグモ (*S.partbilis*) が関西地方に、キュウシュウアリマネグモ (*S.reflexilis*) が九州地方に分布する(小野・松田・斉藤, 2009)。

## 【引用文献】

Hirotsugu Ono, 2011. Notes on Japaners of the Genera Paikiniana and Solenysa (Areneae, Linyphiidae).

Bull. Natl. Mus. Nat. Sci., Ser.A, 37 (3): 121-129.

小野展嗣・松田まゆみ・斉藤 博, 2009. サラグモ科. 日本産クモ類, pp.253-342. 東海大学出版会, 東京.



岡崎市奥山田町, 2011年5月5日, 緒方清人 撮影

(執筆者 緒方清人)